

京都秋期福音特別集会（5）

避所また力

――詩篇第46篇――

1973年11月25日

小池辰雄

第二の宗教改革 神はわれらの避所また力 神われらのうちに 地水火風「の中に」の世界
汝等しずまりて我の神たるをしれ 祈り

【詩篇46】

おんなのこえ

女音のしらべにしたがいて伶長にうたわしめたるコラの子のうた

1 神はわれらの避所また力なり

なやめるとき^{いと}の最ちかき助けなり

2 さればたとい地はかわり山はうみの中央にうつるとも

我儕はおそれじ

3 よしその水はなりとどろきてさわぐとも

その溢れきたるによりて山はゆるぐとも何かあらん

セラ

4 河ありそのながれは神のみやこをよろこばしめ

至上者のすみたもう聖所をよろこばしむ

5 神そのなかにいませば都はうごかじ

神は朝つとにこれを助けたまわん

6 もろもろの民はさわぎたちもろもろの国はうごきたり

神その声をいだしたまえば地はやがてとけぬ

7 万軍のエホバはわれらとともになり

ヤコブの神はわれらのたかき櫓なり

セラ

8 きたりてエホバの事跡をみよ

エホバはおおくの懼るべきことを地になしたまえり

9 エホバは地のはてまでも戦闘をやめしめ

弓をおり戈をたち戦車を火にてやきたもう

10 汝等しずまりて我の神たるをしれ

われはもろもろの国のうちに崇められ全地にあがめらるべし

11 万軍のエホバはわれらと偕なり

ヤコブの神はわれらの高きやぐらなり

セラ



●第二の宗教改革

内村先生が、

「第二の宗教改革を要する。日蓮、道元、親鸞、蓮如というような第一流の宗教人を生んだ日本の国に、福音の世界でそういう人物が現れないか」

と。そういうような宗教的英雄に期待してもいいですけども、あなた方一人ひとり――「一人ひとり」といいますと、我々幾人かいるその一人ひとりと、そう思っ**て**はいかん――あなた方一人ひとりであつて、ひとり誰か、小さな誰か。その小さな誰かが一人であつても、何人であつてもいい。何人であろ**う**が、一人であろ**う**が、一人なんです。そういう消息をつかんでいただきたい。もう正直、希望い**ず**こにありやと。もう絶対的に使徒たちの、小パウロ、小ペテロ、小ヨハネがあなた方の中から現れなくては。また、小マリヤ、小カタリーナというような具合に。私は、小さい群であればあるほど、そのことを期待したいわけ**です**。

詩篇の46篇を選んだのも、やはり偶然でなかつたと思う。これは宗教改革の軍歌である。マルチン・ルター**の**宗教改革の聖戦の軍歌です。それを今日歌う**という**ことは、心で歌う**という**ことは、あなた方がこれを新たな響きをもつてわが歌として、第二の宗教改革の責任と光栄とをあなた方の誰でもが担つて、受けとつて進んでいただきたい。

「わが心定まれり。歌いまつらん」

というわけで、詩篇の中にもそういうのがあります（詩篇57・7）。昨日は、「歌いつつ歩まん」という聖歌（498）も歌いました。とにかく、そういう気持が、気合が本ものにならなくては、生き甲斐がない**です**。この信仰をいただいて、

「まあ、大体キリスト教的な生涯を終えました。めでたし、めでたし」

なんてなわけにはいかない。そういう気合で行つてくださいよ。

そんな大集会だとか何とかは何も要らん。本当のことは個において始まる。単独者、例外者、例外的なものです。キルケゴールではないが、我々は一人ひとりが**そういう**意味における単独者だ。ナザレのイエス・キリストが、言葉のもつとも深い意味における単独者であつた。言葉のもつとも深い意味における単独者。それが実は万人を友としている。万人を友としているけれども、十把一絡げで万人を友として**いる**のではない。万人を友にしているそのことは、一人の単独者は、もう一人の単独者を相手にする。ベートーヴェンが、

「第二の我がいない」

といって、彼は

「私はただ独り、独りだ」

と言いました。そして、彼は止むにやまれず作曲をした。そしたらば、一人どころではない、万人をベートーヴェンは音楽の友に**して**しまった。この世界の果てにいたるまでベートーヴェンの音楽は響きやまない。そういうことを思いますと、



「個というものが本当に個に徹すると一切である」
ということを思う。

いわゆる「コイノニア」「交わり」は結構ですよ、我々も交わりをやっている。けれども、ただ「コイノニア、コイノニア」といつて、いい加減な交わりをしたって、これはひとつもダメなんです。それはクラブみたいなもの。皆さんはそういうコイノニアではなくして、真に単独者に徹する。それはいわゆる「孤高」というような意味における単独者ではない。孤高というと、孤が高くある。そうではない。もし、「孤低」という言葉はないけれども、孤低にならなければ、万人を相手にすることはできない。黙って一切をどん底から担い上げる単独者。涙を腸の中に落として^{はらわた}いる単独者。それは深い愛の涙です。

私は何かこう話しますと、何も考えていないです、ここに立っている時に。次から次へとそういうことになっていく。要するに、この1973年11月25日、詩篇46篇。これはあなた方に忘れられない日になると信じます。それでは始めます。

実は、私は自分の書いたものがあつただけでも、またどこかへいつてしまつて、とうとう見つからないで、そのまま来てしまった。この詩篇46篇は『キリスト教常識』という雑誌に自分の翻訳とその解説を書いた。なかなか会心の作であつたから、それを参考にしようと思つて、この三高会館に持つてこようと思つただけでも、一向どうも参考することができなかった。

●神はわれらの避所また力

「神はわれらの避所^{さけどころ}また力なりなやめるとき^{いと}の最^{さい}ちかき助けなり

詩篇の150篇の中でもっとも大事な句の一つであります。それで演題を「避所^{さけどころ}また力」とした。避所と力とは離してはいけない。我々にとつては、ただ力でも、ただ避所でもない。避所にして力という。これは十字架と復活ということです。わが避所は十字架である。十字架の門の中である。

どんなことがありましても、十字架のキリストの中に私は逃げ込むんだな。逃げ込まない人は、どうぞ、逃げ込まないでください。私は臆病者だから、逃げ込む、この十字架の中に。パウロさんも十字架の中に逃げ込んだ。十字架の中に逃げ込んだら、パウロさんはえらいことになった。そういうわけで、皆さん、

「どうもこれは困つたな、迷つたな」

という時は、何も相談は要らんですよ。十字架のキリストの中に逃げ込んで、その中におれてください。泣いて倒れればいいんだ。そうすると、そこは素晴らしい温泉みたいなところですよ。私は温泉が好きだけれども、キリストに暖められてしまう。キリストの愛は温泉以上です。キリストの愛にすっかりとかされてしまう。その十字架の愛の中には既に復活の生命が、もの凄い生命がそこにかかつてきている。甦りの生命が。それで、甦りの



生命にあずかると、聖霊の光が臨んでくる。光でも愛でもある。

要するに、「神は」ではない、「主は」である。

「主は我らの避所さけどころである。主は、キリストは、あなたは、私の避所。十字架のあなたであり、復活のあなたであり、御霊のあなたです。渾然としてこれをわけることのできないあなたであります」

と。そうすると、どんなに人に何と言われようが、どうであろうが、もう大丈夫。もう力が来ている。だから、「避所」という言葉の方が「力」よりもなお大事な言葉なんです。

「汝はわが避所」と言って入ってみると、自然にそこに力がくる。御霊の力が浸透してきますから。浸透しなかったらウソですよ。だから、もうこの句はやりきれないです、詩篇46篇の第1節は。

「主さま、あなたはわが避所また力である」

と。この力は何者にも負けない。これは不思議だね、本当に。孔子が、

「千万人といえども我ゆかん」

と言ったけれども、そんなに力まなくたって大丈夫です。あなた方一人ひとりがもう力です。いいですか。日常の経験でね、それを本当に体験してくださいよ。

「いやあ、今日はいい話を聞いた」

なんてね、ただの話にしてしまったら、お話にならないですから。そういう、体験して身につけないとね。本当の真理というものは身に付けなければならない——「ならない」ではない——それでなければ、真理ではない。

「真理」は本当はこう書かなくてはいいかん、

「身理」

と。これは今日初めて書く。身ことわりの理。身が即ち理である。観念的な理ではない。具体的な理である。具体的な理であって、キリストは正にこの「身理」なんです。だから、仏教の方でも、「法身ほっしん」というでしょ。即ち、法と理は同じ。法は身に付いている。釈尊は即ち法身である。キリストもまた神の霊法が身についている。これが「身理」だな、本当に。「アレイヤ」という。

これを地道にやってください。問題があればあるほど結構です。それは真理が身につくから。キリストという避所に、十字架のキリストという避所に入ったら、必ず勝つ。

「何だ、あいつは卑怯だな」

なんて。ところがどっこい。しかし、

「私は信仰的英雄である。ひとつサタンと一騎討ちしよう」

なんてやったら、サタンに負けるよ。えらそうだけれども、信仰的英雄というのは気合がよきそうだけれども、これはサタンに負ける。サタンが来たら、急いでキリストの中に逃げて行ってしまう。そうしたら、サタンは



「あれは敵^{かな}わないから、私は逃げて行こう」

と、今度はサタンがどこかへ逃げてしまう。キリストに逃げるということは、

「主さまー!」

と呼ぶことである。

「十字架!」「甦りの主よ!」「御霊の主よ!」

と叫ぶこと。これが即ち避所です。もう言葉も行為も一つです。楽しくてしょうがない。

私は正直、日常生活でそれをやってますよ。ええ学校で。まあ私みたいな年配になってやつと、「やってます」なんていうのは情けない話ですが、あなた方はもう20代から「やってます」ということになってください。もう私くらいの年配になったらどういうことになるかね、変貌してしまうのではないかな。私はあなた方がうらやましくてしょうがないな。20代でこんな真理の世界に入ってしまったて、もったいないよ。もう少し散歩して来なさい(笑)。でないと、真理の有り難さがわからない。当たり前のような顔してるのは、冗談じゃない。私はとにかく50年かかってここに到達したので、そんな安売りするわけにいかない。会費1億円くらいにしようかな(笑)。冗談ですよ。値打ちはない。金では測れない。だから、私はせっかく70歳になってここに到達したから、もったいないからね、これからまだ30年はどうしても生きなくてはならない。100突破しなければ、あと30年くらい仕事しなければ、仕事にならんよね。そういうわけです。

●神われらのうちに

「主は我らの避所また力なり」

と。第二の宗教改革はこの一句を身につけて進んで行くこと。いいですか。

「悩めるときのいと近き助けなり」

と。

「人生は悩みの谷、涙の谷」

という。そういう涙の悩みの谷。しかし、そういうときにこそ、近き助けである、身近な助けである。

「どうも私は次から次へと問題が起きて困ったな。神さまは不公平ではないか」

なんて。神さまは愛する者を試みたもう。愛する者に悩みを、苦しみを与えたもう。困れば困るほど、主さまに愛されていると思ってください。「思ってください」ではない、本当にそうなんです。患難を通らないで、今までに本当のものはありましたか。およそ素晴らしいものはみな血と涙を通った仕事、その実であります。

「ドウルツヒ ライデン フロイデ」(durch Leiden Freude 苦難を通して歓喜へ)

という。ダンテがああ苦難を通して「コメディア」「喜曲」と言った。

「トラゴイディア」(tragoidia 悲劇)



とは言わなかった。ベートーヴェンも終わりに、

『ブラウディーテ・アミキ・コメディア・フィニタ・エスト』

(喝采を、諸君、芝居は終わった！)

と言った。即ち、

「兄弟たちよ、友達たちよ、喜んでくれ、この喜劇は終わった」

と言う。耳が聞こえなくなつて、音楽家は耳が聞こえなければ、ある意味において致命傷です。けれども、彼は霊の耳をもつて聞いていた。彼の傑作はみな、彼自身は肉の耳では聞こえなかったところの音楽でありました。ミルトンも自分では書けなかった。娘さんたちに書いてもらった。あの『パラダイス・ロスト』はそういうものである。……

もうあなた方は心が定まつたね。患難を避けたらダメだよ。避けて入るのはキリストの中です。患難を避けたらダメ。患難にはどしどしぶつかつて進んで行く。

「つきことの猶なほこの上に積もれかし 限りある身の力ためさん」(熊沢蕃山)

なんて、あれは少し力みの歌だけれども。

そういうわけで、「いと近き助けである」という。谷底と思ったら、それは峰の上である。地獄だと思ったら、それは天国である。キリストが共にあるところ、身近にいらつしやるところ、そこはどんな所でも天国である。恋人が恋人と一緒にいる所はどこへ行つても天国だ。そういうところからもつと突き抜けて体験してくださいよね。

そういうその身近も、身近ではまだ足りないんだ、本当は。身の内。身近は今度は身のうち、身の中、「イン」の世界。何事も「イン」の世界に入るまでは本ものにならない。

この詩篇に、「神われらと共に」という句が三つある。「インマヌエル」という。

「神われらのうちに」

と、第二の宗教改革は「神われらのうちに」と歌わなければいかん。さつき私が言ったのはそのことなんです。「新しい響きを」というのはそのことです。ルッターさんは、

「小池には参った!」

なんてね。いいですか。私はふとどきな野郎でね、相手がどんな偉人であつても、この頃はびくともしない。これはキリストがケタ違いの人ですから。これが入つてくると、相手がダンテであろうが、ゲーテであろうが、ベートーヴェンであろうが――もちろん、そういう大詩篇とか大音楽は私はひとつも書けない――けれども、歌わざる詩人、作曲せざる音楽家なんてなわけだ。始末がわるい男だね。

あまりそういう私のもの凄いケタ外れの言葉を何か雑誌に書かないでくださいよ。それで、

「小池なんてのは、あれはキチガイだ」

なんて思われるから(笑)……。正直、そういうわけなんです、気合は。だから、私のこの無限無量の気合をあなた方に伝えておけば、あなた方が今度はそれを受けとつて、またど



しどし自在に伸ばしてください。何も無いんだから、僕は。

2 さればたとい地はかわり 山はうみの中央もなかにうつるとも 我儕われらはおそれじ

3 よしその水はなりとどろきてさわぐとも その溢れきたるによりて山はゆるぐとも 何かあらん

(この故にたとえ地は変わり山は海のものなかに移るとも、我らは恐れない。たとえその水は鳴り轟き、あわだつとも、その騒ぎによって山は震え動くとも、我らは恐れない)

天変地異のことが書いてある。これはあそこに大地震があつた。そういう歴史的な経験を背景として見ているようです。大体、この詩篇の背景は――これは註解者が大抵そう言っているんですが――ユダの王ヒゼキヤの時にエルサレムがアッシリヤのセンナケリブの軍に包囲された、紀元前701年。そして、エルサレムは落ちると思つたところが、どっこい一夜にしてこの大軍が死んでしまった。何か急に病に襲われたか何か知らんけれども。それで囲みを解いて逃げて行つた。これは預言者イザヤの信仰が勝つたんです。

「うろたえるな、より頼め。神さまが今日、なしたもう」

と。モーセと同じです。後ろからエジプトの大軍がやってきて――背水の陣ではない。前に海がある前水の陣だ――前に水を持つている所に来て、もうこれ以上逃げていけば溺れるという。そういう瀬戸際にきて、モーセが手を挙げて神に祈つたら、大風が来て水が引いたという。水が割れて――あの「十誡」という映画がなかなか素晴らしくやつている――あのようにして救われた。極まつたと思つた時に、相対的なあなた方の経験で、

「もう私はこれでダメだな。一向、試験には及第しないし」

なんて、いろいろなことがある。試験ばかりでない。

「一向、結婚のことがうまくいかない」

とか、いろいろなことがありますけれども、その極まつたと思う時に、実は神さまが道を開いてくださる。だから、絶対に信頼していく。神の顧みが、その人その人にとって、のびきならない顧みをしていく。それを本当に信頼していく。私もとにかく、いろいろ不思議なことを経験した。「やつぱりそうだったな」と思うことが時々ある。

そういう歴史的な背景で書かれたものです。……(太平洋プレート沈み込みで関東平野が傾き水没するうわさ、省略)……これは地震ではなく、天震だと言うから、私はこの頃、預言的な名前「天震」と自分で言っている。今日の「てんしん」の字は「天震」だけれども、「日」を「雨」にすると――私は雨男だから――「震」の字になる。辰たうは雨を呼ぶ。けれども、「晨あした」は終末の歴史の終わりの新天新地のあしたのことを「天晨」と称する。終末的希望の名前であります。

正直どうなるかわかんから、私たちは毎日毎日を本当に天国人として生きなくては行かないわけです。「どうにでもなりやがれ」と。たとえば太平洋に沈もうとも、わが存



在はキリストに中空に迎えられるのだと。テサロニケ書(4・17)に書いてあるね。

もう本当にね、あなた方、いい加減な信仰ではもたないですよ、これからは。天変地異のことにしろ、あるいは人災のことにしろ、精神的あるいは物質的公害のことにしろ、さまざまな危機に囲まれている。「勝手にしやがれ」というような、棄て台詞せりふみたいだけれども、大丈夫なんです。

「我なり、懼おそるな!」

と。この「我なり、おそるな」の永遠の腕かいなにつかまえられて進んで行きましょう。

「キリストは、腕は一つしかないから、奥田君が支えられたら、私はどうしてくれるのか」

なんて、そういうことではないですよ、この宗教の世界は。それは本当に御霊の世界の神秘なんです。

だから、今の人には信仰は持てないですよ。頭で何か解釈して納得しなければ信じないようなことでは。頭で解釈して納得されるようなことだったら、私は信仰なんか持たないよ。そんな安っぽい神さまだたらごめんだ。もうこっちから考えると、訳わけのわからない野郎だ、神さまは。そういう訳のわからない――「野郎」なんて言ったらわるいだけれども――神さまですね。だからこそ、

「訳のわからない神さまだからこそ、信ぜざるを得ない」

と言って、もの凄い中に入って行くわけです。……(異言)……

●地水火風

4 河ありそのながれは神のみやこをよろこばしめ 至上者いとたかきもののすみたもう聖所
をよろこばしむ

(ひとつの河がある。その流れは神の都を喜ばせ、いと高き神の聖なる住まいを喜ばせる)

もちろん、これは作者としては、エルサレムのことを言っているわけですが、これは天界です。地上のシオンではない。旧約の世界はまだそういった制限があります。我々は、このキリストの光で見れば、これは天の、天界の宮、新しきエルサレム、天のエルサレムです。「エルサレム」というのは「平安の神」ということです。

「我々に平安を与えたもうところの神」

という、素晴らしい名前だよ、「エルサレム」というのはね。

そういう、我々は天の都の、既に天の都の――地上の大都会ではない――天の都の市民である。だから、

「国籍は天にあり」

と、市民権は天にありという。天のエルサレムの市民権をキリストの恩寵によっていただ



いているわけだ。

「河」は何ですか。生命の水です。活ける水です、この河は。断食しても水だけは飲む。水のない断食もありますが、これはもの凄く大変な断食です。

一番、人間に大事なものは空気、その次は水。もちろん、太陽の光はその大前提になるけれども。だから、この「四大」というのは素晴らしい真理を持っている。地水火風。水も風も火も。面白ね、この地水火風というのは。風は気でもある。これは「ルーアツハ」で霊です。火も、「聖霊は火の如く」という。

「御霊と火をもってバプテスマする」

という。御霊のバプテスマのないものはクリスチャンではない。もう第二の宗教改革ではこれをハッキリやっていかなければダメです。今までのような、そんな気の抜けたような信仰では。だから、

「使徒的信仰に帰れ」

と言っている。「水」も、ヨハネ伝4章にあるように、サマリヤの女との対話で、

「活ける水をお前に与える。渴かない水を与える。その水がお腹から泉の如くに湧

き出でるぞ」

と。「地」は何ですか。誰か答案を書いてくれませんか。これはさつきから言っている、どん底の態勢です。何でも引き受けてしまう。どんなものでも引き受けて担っているものがこの大地である。本当の霊を受けると、本当の荷のない姿になるというわけだ。

どういうようにして、こういうことになるのですかね、話が。本当の霊を受けるとね。

大地は何でもござれと。聖きも聖からざるものも、直きも直からざるも、冷たきも暖かきも、暗きも明るきも、何でも全部引き受けてしまう。そして、草木を全部生やして美しい花を咲かせる。

この地水火風の如き人になる。我は水となり、我は火となり、我は風となり、我は大地となる。そういうひとですよ。

「小池先生の本質は何ですか？」

と聞かれたら、

「あれは地水火風だ」

なんて（笑）、そういうような答案を書いてくれたら、私は感謝するよ。ハレルヤと言うよ。楽しいです、非常に。

まあ私の話は聖書解釈でも何でも無い。聖書をきっかけに勝手なことをしゃべっている。「勝手なこと」と言っちゃって、これは天界から来ているところの、上から来るところの真理が自ずから湧き出てくるという有り難い仕末です。あなた方も、聞くも語るも同じこと、「そうだ、そうだ」と。

5 神そのなかにいませば都はうごかじ



(神がそのうちに居られるので、都はゆるがない)

そうです。神さまはうちにいらつしやる。キリストがこの我々の東京の中に、京都の中にいらつしやるならば、――京都、東京という町は動かない町になるが、どっこいいらつしやらない――その中のごく一部の人の中に来てくださる。けれども、ごく一部の人でいいです、たった一人の人でもいいです。

「義人が一人いるならばエルサレムを赦す」

と、エレミヤの5章1節に書いてある。もう絶対に「中」の世界です。

そういう面でも、あのゲエテというのは偉かったね。

「宗教は上なるものに対する拝み」

という。民族宗教です。それから、

「横なるものに対する畏敬」

これは偉人において、特別な偉人において現れているところの、その同じ人間の中におけるところの尊敬。ある意味において神格的なもの。そして、

「下なるものに対するところの畏敬」

これはキリスト教、僕の姿。イエス・キリストはどん底の、下の人間、底辺の人間、平伏しの魂です。そして、最後にゲエテは何と言ったかというところ、

「内なるものに対する畏敬」

と。自分自身。この自分自身というのは相対的な自分ではない。自分の中にある、「己に対する畏敬」とゲエテは言った。少し乱暴な言い方をしている。「己に対する畏敬」なんていうものを、もし取り損なったら、とんでもないことになる。即ち、己の中に来たり給うところの主です。もし一般的にいうならば、山川草木、あるいは

しゅじょうことごとぶつじょう
「衆生 悉く仏性あり」

という。衆生悉く仏性ありで、

「人は神の似姿に造られている」

という。一人びとりは神の似姿である。仏性を、仏の性を人間は本来持っている。あの孟子の性善説というのはその角度の――孟子は宗教的にもっと力強くつかめばよかったんだけれども――そのところがちょっと孟子は惜しいですね。

そういう「内なるもの」ということ。それは御霊が来た時に初めて、

「内なるもの、わが内なる御霊の主に対する畏敬の念、礼拝」

これが内の世界です。ここにきて初めて宗教は本ものとなる。そしてこの四つ――上、横、下、内――これを全部持つんです、本当に内なるものが本ものになってくれば。そういうこの内なる世界が、

「御霊を内に宿さなければ」

という。パウロ、ペテロ、ヨハネがなぜ凄いことになったかというと、みな内なるキリス



トを持っていたから。「キリストわれと共に」ではない。「内なる」ということは、共にでもあり、上でもあり、下でもあるものを持っている。

だから、超在、貫在、偏在、内在という。本当に内在を持っていれば、偏在であろうが、貫在であろうが、超在であろうが、みなそれらを持っている。本当の世界は一切を包摂してしまうんですよ。

「これではなくてはならない」とか「あれかこれか」なんて言っているうちはダメなんです。だから、

「主義だ、イズムだ、やれ何とかか何とかだ」

なんて、限定しているのはみんな気の毒ですよ。それで

「大いに私は真理をつかんだ」

ような顔している。

「無教会主義なんて、主義なんてよしなさい」

と言いたい。内村先生は大きな魂だったんだけど、ちよつとそこらはまだだ。

●「の中に」の世界

「神が、主がその中に居られるので都はゆるがない」

という。主が私たちの中にいらつしやるので、この群は絶対に滅びない。「私たちの中」ということは、「わが中に」がまず奥になればダメです。わが中になくて、まあ我々五、六人いるとだいたい良きそうだから、「の中に」と。冗談じゃない。一人びとりの中に本当にいらつしやらなくてはね。

神は朝つとにこれを助けたまわん

（神は朝早くこれを助けられる）

なんて、妙なことが書いてある。朝つばらから、神さまの助けは初めから始まっている。もう初めから神の助けは始まる。どういうことですか。我々が朝起きた時に、床の中でも、坐っていても、どうでもいいけれども、起きる瞬間に「主さま！」と言って、主はわが内に来たる、その主の助けを先ずいただいてから一日が始まらないとね。それを本当にやってごらん。本当にそこから始まるというと、一日がちがってくる。それをいい加減にしていると、何かうまくない。

ミルトンの『パラダイスロスト』の第5巻に、

「始めも終わりも中も、我は神を讃える」

という句があった。

「我は始めなり、終わりなり」

という。本当の始めと本当の終わりと本当の中は、これは切っても切られないです。「我は始めなり、終わりなり」というときは、同時に



「我は中なり」

なんです。この「中」という字が大体、素晴らしい。貫いているんだから。これはコマなんだ。これは地球なんだ。地球の地軸を中心にして地球は回転している。そして太陽の周りを回っている。この我々の地球が真理をちゃんと語っている。「中だよ」と地球は言っている。「私の姿は中だよ」と。グルグル回っているのはちゃんと地軸がある。これを「中」という。

「中道」というね。本当の道は左でも右でもない。中です。だから、中心を持たないものはみんなダメなんです、本当は。「中心」とは素晴らしい言葉だね。

私の話は、あなた方は文字にしようと思ったって、文字にはならないよ。文章にしたなら、「なんだ、これは一体？ これはお話でしょうか？」

なんてなことになる。あなた方は聞いていらつしやるといって、これはお話なんだ。書くというところから録音が一番いいかもしれないね——文字にするとダメになる。

「それではもう文字にするのはよそうか」

なんてね(笑)。

「中」です。どうぞこの「中」をしつかりとつかまえていく。中心。中心のある人。私たちの中心はキリスト、これが自主という。「自主、主体性」とか何とかいうが結局、中の世界です。

⁶ もろもろの民はさわぎたち もろもろの国はうごきたり 神その声をいだした

まえば 地はやがてとけぬ

(諸々の民は急ぎ立ち、諸々の国は揺れ動く。神はその声を出される時、地は融ける)

と。神さまのない、いわゆる自己中心の——この中心はちがうよ、この自己中心は——自我というような自己中心の、そういうような個人であろうと、社会であろうと、国家であろうと、これはちつとも平安にはならない。詩篇の第2篇にもあるとおり、騒ぎ立ち揺れ動いている。今も昔も同じことだ、二千年前も、二千何百年前も、20世紀の今日も。そして外交だ何だかんだとゴタゴタやっているけれども、みんな体のいいゴマカシに過ぎない。利害打算で動いている。バランスがとれないとうまくないから、適当にバランスをとったりにしている。

「神はその声を出されると、地は融けるほどにその地がまた揺れてしまう。国々はみな神を嘲つても、それはダメだ。神さまの方はむしろそういうものを気の毒に思う」

と。

「エホバ笑いたもう」

なんて書いてあるね。地上の混乱は方々にこの詩篇に引用するところはあるけれども、今



日はよしましう、もうそういうことは。

7 万軍のエホバはわれらとともになりヤコブの神はわれらのたかき櫓なり

(万軍の主は我らと共におられる。ヤコブの神は我らの避所である)

これはハッキリとユダヤ的な、ユダヤ民族、旧約的な言葉ですね。万軍の主は、即ち、天の万軍は、天使や向こう側に行っている、神を信じた人たちは我らと共にある、一緒にある。いいですよ、「共に」でも。

しかし、「共に」が本ものであるためには、共通なるものがないといけない。それは「中」というもの。では、何の中か。それは旧約においては神の霊。こちら側からいうと、信仰がひとつ。信仰が貫いている。昨日からのお話でいうと、本願が貫いている。そのときにそういった共通項がある。公分母があるときに、その時に初めて「共に」ということが本ものである。

キリストは神さまと共に歩いた時に、キリストの中、神の中にあるところの共通なものは御霊である。「三位一体」というけれども、この御霊が実はその媒介者である。我々が本当に仲がいいというのは、それはみんな御霊が通じている。御霊の共通しているクリスチャンというものは、みんな考えがちがったり何かしても、本当にとけて開けっ放し。もしあなたの方の中に――人間はいろいろな性格が違ったり、いろいろするよ――けれども、そういった相対的な違いをもつて妨げとしていううちはまだダメですよ。相対的な違いで人間はいろいろ好き嫌いもあるさ。けれども、それを貫いたところの御霊の愛というのが、これが本当になっていかなければ。「コイノニヤ」なんて言っちゃって、それはダメだよ。それが突き抜けの世界です。

私は不思議なやつでね、大体、みんな一人ひとりの感じなさる感じ方や、思いなさる思いは、共に感じ、共に思うことの割合幅のある柔軟性のあるやつです。そして、甲に対して「ああ、それもそうだろう」、乙にも「それもそうだろう」と。

「先生は、一体どつちを本当にしてくれるのか？」

「どつちも本当だよ」

と。それぞれの善さというものが見えるものだからね。しかし、それぞれの善さだけれども、その限界があるから、もうひとつ奥の世界から、そういうことになる、全然どれをも肯定しかねるところのものが出てくるわけです。どれをも肯定しかねるものが出てくるが、――そいつを出すという――今度はどれをも救ってしまう。どれをももうひとつ奥の世界で肯定してしまう。わかりますか。そういうようなものの掴み方が、これが本当の御霊の世界です。それが偽りでない限り。

「万軍の主は我らと共に」

という、その「と共に」が遂にそれだけの掘り下げを私たちはさせられる。「共に」ということだけでは、気が済まないです、私は。「共に」がいかにして本当であるかという、ど



うしても共通なる「中」がなければ、「共に」ということが浮いてしまう。一時的なものであり、また本質的なものでなくなる。もう現実が証明する。

ですから、どうぞ、皆さんは、「兄弟姉妹」というときは、いいですか、結婚しようがしまいが、本当にキリストにおける兄弟姉妹というものは天的な関係ですよ。天的な関係は、地上におけるところの——そういった民法だか何だか知らんけれども——そういう関係をもうひとつ突き抜けた世界を、地上においての天国を持たなくては。それだけの魂になつてくださいよ。

●汝等しずまりて我の神たるをしれ

こうやって集会をして、あなた方と私は、会話はしていない。会話はしてないけれども、私の話は会話なんだ。あなた方は何も言わないけれども、もうビンビンと私に響いてくる。モノローグ式(monologue ひとり語り)でありながら、実はダイアログ(dialogue 対話)である。いわゆる話し合いでもって、相対的な話し合いで、それから結論を出そうなんて、そんな民主主義が多いけれども、そんなものではない。これは困ったね、真理は深いので。いいですね、そういうものです。

藤井先生という人は、私が今言っているような意味で、御霊のことをそう仰らなかつた。けれども、私は藤井先生の所で話を聞いて——十何人の家庭集会だよな、世の中の片輪みたいのばかり——先生は声を大きくしないけれども、腰掛けてものを言っている。私たちは日曜の聖書の話をじーっと聞いている。終わってから何も質問しない。何か言ってはわるいと思って黙っていた。とにかく静かなものです。日曜の午後に、ダンテやミルトンやカントをやつて、そういうところでは少しは先生と会話するけれども、集会そのもののあとでは何も質問しない。これは五年間、受けとりっぱなし。受けとりっぱなしだけれども、本当にこれは吸い込んでいる。

何を聞いたか、具体的には今はいちいち覚えてはいませんよ。けれども、それが本当に受けとりながら、今思うと、ある会話ができています。それから、私は何か思つて行くでしょ。そうすると、先生はその時に私が思っているようなことをしゃべっているんだよな。不思議でしょうがないことがいくたびもあった。その点で私は藤井先生とは非常に以心伝心、魂が似ていたんだな、やつぱり。だから、私は、

「これはうまいこと私は思いついた、ひとつ本に書こう」

なんて思つても、先生が言つてしまうものだから、「おもしろくないな」なんて(笑)。何でも私が思うことを言つてしまうものだから——会話しないでですよ——

「どうして、こんなにピタリなんだろう」

なんて思ったことが正直ある。

「ヤコブの神は、即ちイスラエルの神は、我らの避所である」



本来にイスラエル人はヤーヴェーの神を、力を与えるところの避所とした。これは体験から来た言葉だから、これを私たちはもちろん、主イエス・キリストにおいてこの言葉が本当に生きてくるわけです。マルチン・ルターはもちろん、有名な「堅き城」(われらの神は堅き城なり)の歌でもつて、これをキリストにしてみました。ルッターという人は、旧約のヤーヴェーの神をほとんどキリストと考えて彼は読んでいた。

8 きたりてエホバの事跡をみよ エホバはおおくの懼るべきことを地に^{おそ}なした
まえり

9 エホバは地のはてまでも戦闘をやめしめ弓をおり 戈をたち戦車を火にて
やきたもう

ということは、先程のアッシリヤ軍がやつつけられて、そしてその大軍が囲みを解いて行ったということが背景になっているんだらうと。この詩篇をもう少しテキストの上からみると、イザヤ書からきている言葉が非常に多い。だから、ひよつとすると預言者イザヤが書いたのではないかと言われるくらいです。

一番先に言うのを忘れたけれども、

「聖歌隊の指揮者によって、女音のしらべにしたがいて伶長にうたわしめ
たるコラの子のうた」

という表題がある。「女の声」というのはオクターブが高いソプラノ式なんです。「コラ」というのはレビの孫、曾孫だったかな。これはやはり祭司の務めをさせられた連中です。地上に戦がなくなるようなことになる。

「槍や剣が鎌に変えられる」

というようなことがミカ書とイザヤ書に出ていた。けれども、地上には相変わらず戦争は、武器は絶えない。歴史の終わりまで戦争は絶えないでしょう。でも、神さまが本当に臨まれる時には、人間の武器は武器そのものによって滅びていく。

「剣を執る者は剣によって滅びる」

とキリストが言われたとおり。まあ無駄な戦備をやっている20世紀は本当に、

「何が文明だ、何が文化だ」

と言いたいわけです。聖地イスラエルも、ヨルダンやアラブの連中とイスラエルとの関係はあのとおり、どうにもならんですな。まあ人間というのは本当に始末のつかないものです。だから、絶対に救いを必要とする。救いは宗教、福音なくして、もうすべてのことはみんな行き詰まってしまうです、ハッキリ。

「御名を羞^はじる者は、我は神の前に否むぞ」

とキリストは言われたが、私たちは、

「われ福音を恥とせず。宣べ伝えざればわがわいなるかな、止むを得ざるなり。
止むにやまれずして語らざるを得ない」



と。エレミヤが、

「もういい加減で、これは黙^{もだ}そう。何か言葉を発すると、自分は迫害されるし、誤解されるし。けれども、黙^{もだ}そうとしても、わが骨のうちに火の燃えつくが如くして、黙すに堪え難し。」

と、「言わざるをえない」と言った。あなた方も、この生活の中でも、言うべき時にはハッキリ言いなさいよ。勝ちますから、必ず。そして、何かそこに本当の権威があると、相手は打たれる。人間の魂は本ものにぶつかると、やっぱり何か感ずるんですよ。

¹⁰ 汝等しずまりて 我の神たるをしれ

(静まりて我こそ神であることを知れ)

「静まりて」というのは、戦いをやめて、中止して休戦して、という気持がもとの意味ですけれども、もうひとつ内側からいえば、本当に祈りに静まる。心を静めて、祈りの世界に入ると、本当の静まりです。

「祈り静まりて、静まり祈りて我の神たるを知れ」

と。

「戸を閉じて密室で祈れ」

と昨日あったですね。

「わがうちなるところに入つて、父なる神に祈れ入れよ」

と。主さまに深く祈り入ることです。「祈る」という字は「のる」とも読む。のりいれる。イザヤ書30章15節にも、

「汝ら静まりて依り頼まば救いを得る」

とある。あの「静まりて依り頼む」も、

「静まり祈りて依り頼まば救いを得る。けれどもお前たちはそうしなかった」

とイザヤが嘆いている。

この10節は非常に大事なところですよ。静まって、私たちがエホバを神であることを知れと。神であることを知るためには、神を主を受けとらなければダメです。静まって祈りの世界に入れば、主を受けとる。主を受けとると、主を知るわけです。何か現象的に知るのではない。一番内的に本質的に受けとることが「知る」です。友人関係だってそうです。

「汝われを知る、われ汝を知る」

というこの「知る」は、本当にその中に入つて、心を心とするということ。ベートーヴェンが永遠の恋人に、

「われは汝のもの、汝はわがものなり」

と書いた。その「不滅の恋人」は誰だかわからない。私たちの「不滅の恋人」はキリストであります。だから、

「魂とキリストとが一体となる」



とルッターが言った。そういうようにして、

「静まり祈つて、私こそが神であることを本当に受けとって知れよ」

と。そうしたらば、

われはもろもろの国のうちに崇められ全地にあがめらるべし

御名が讃美される。本当の平和はそこからやってくるので、そうでない限りは、平和はない。神さまとの関係ぬきに、神さまとの貫きぬきに、内在の関係なしに、平和は来ないと申し上げているとおりであります。

11万軍のエホバはわれらと偕なりヤコブの神はわれらの高きやぐらなり

と。

おそまつですが、それで一応、46篇は終わりますけれども、この46篇を題材として――今、「おそまつ」と言っただけでも、しかし――その「おそまつ」の中に非常に大事なことがあったのは、あなた方は既に受けとってこられたと思う。

第二の宗教改革の中核は、「共に」ではなくて、「中なる」もの。この御霊のキリストを本当に受けとっていくことが――マルチン・ルターはもちろんその角度を持っていたのだけれども、まだそこが現実には不徹底な面があった――それはパウロの御霊の世界に比べれば、ルッターはやっぱズレている。「ズレている」と言っただけは言い過ぎか、表現がわるいか知りませんが。パウロのあのもの、凄い白熱的な現実というものは、もうパウロさんにかなうものはないですよ、そういう深さにおいては。もちろんアッシジのフランシス、サンダーシングとかいますけれども。しかし、あの重厚さとエネルギーは、パウロというのは何という人物かと正直思うですよ。キリストをぬいては、もうパウロは第一の人ではないですか。凄い野郎だよ。そいつが、

「私はしょうがない野郎で、ああ悩めるかな、この死のからだより……」

と苦しんだ。救われても、彼の中にはそれがあった。

「わがうちなる刺を何とかして抜いてもらいたい」

「わが恵み汝に足れり」

なんてやられた。

「われは罪びとのかしらなり」

と。そういうものの凄い矛盾構造といえますかね――分裂構造ではないですよ――本当の深い矛盾は大調和の世界なんです、本当は。調和と矛盾が実は、一つなんです。

大自然を見るとわかる。ゲートというのはそういうことの掴めていた人です。まあゲート研究なんていうものは大変だよな、毎年毎年、本が出るけれども、ゲートを研究するのではなくて、ゲートをつかまえてしまうような、そういう光で見ているやつがやっぱり少ない。これはキリストを持つているから。晩年のゲートが、

「私はキリストの前には無条件に頭を下げる。太陽の前には私は無条件な畏敬の念をは



らうが、キリストの前にも正に無条件に頭を下げる」

と言ったではないですか。ナポレオンがセントヘレナでナザレのイエスの前に降参した。

「福音書は文字ではなかった。これは生き物であった」

と言ったではないですか。さすがにナポレオンは最後に福音書の本当の姿を見た。もう何ととっても、この聖書一卷にはかなわんですよ。創世記から黙示録に至るまで神の霊が貫いているんだから。

●マルチン・ルターの歌

今度はマルチン・ルターの歌を少しやります。これは私の文章です〔註：著作集第7巻『聖書の人ルター』に掲載〕。

「音楽は神の美しい素晴らしい^{たまもの}賜で、神学に近い。私は私の貧しい音楽をあまり問題としないけれども、若い人達はいつもこの芸術に親しむべきだ」。「サタンは音楽が非常に嫌いだから、音楽で多くの誘惑や邪悪な想いを追い出すに如くはない」。ルターの卓上談話の中にこんな言葉がこぼれている。

神学と音楽はルターには姉妹であった。何故であらうか。「エホバとその聖言のために我は酔える人の如く酒に勝たるる人の如し」と預言者エレミヤは言ったが、ルターもそのように神の言に捕えられた人で、彼の神学の性格は、彼のパトス(熱情)が神のパトスにぶつかって碎かれたところに展開していく。パトス的なものである。そこがカルビンのロゴス的な性格の神学と異なるところで、ルターが、神学すること、パトス的な芸術である音楽を愛することとの間にむしろ深い内的連関をもち得た^{ゆえん}所以であると思つ。

ルターは少年時代から歌が好きであった。かのウルズラ・コッタ夫人が少年ルターを迎え入れたのも、彼の心からなる歌い方と祈りとに感動したからであった。彼はまた学生時代に、かの奇禍のため永い病床に就いた折にも^{ラウテ}琵琶を学び覚えて自ら慰めた。かの修道院に隠れる前夜には友人たちと素人音楽会を催した。かのヴォルムス国会への途上でも、フランクフルトの旅舎で琵琶を快活に奏でる彼であった。

彼はこのように疑いもなく、楽人の素質を有っていた。彼が詩才をもっていたことも既に学生時代からあらわれていた。しかし、問題は単なる楽才詩才にあるのではない。彼の魂のパトスにある。誰か聖書に躍動している神のパトスをルターほどにつかみ得た人があるうか。独乙讚美歌がルターに於て最高の表現を見出だしているのも、神のパトスに迫られた彼が、その詩才楽才を以て心からなる讚美の歌を詠むざるを得なかったからに他ならない。

ハンス・ザックス(Hans Sachs)はルターを「ヴィッテンベルクの^{ミッテン}小夜啼鳥」と呼んだが、この^{うぐいす}鶯な^{うぐいす}る鶯をして最初に讚美歌を作らしめたのは、1523年7月1日、



アウグスティン派の、その名をフェース (Voss) 及びエッシュ (Esch) と称う二人の若き修道僧が、福音的信仰告白のために、火刑に処せられた事件であった。ルターはこの報に接するや、痛く泣き悲しんで言った、「私こそこの聖なる福音のために殉道の死を遂ぐべき最初の人であると思っていたのに。私にそれが許されなかったのか。」

「新しき歌を我らは始めん」 (Ein neues Lied wir heben an) の頭句に始まる全十二節（一節九行）の歌を、彼がこの両殉道者のために、而も宗教改革の最初の讃美歌として詠ったことは我らも心に銘記すべきことである。その第十節で殉道者の屍灰の勝利を謳って曰く、

屍灰は徒だに消え去らず、

屍灰は四囲に飛び散らん。

小川も穴も堀も墓場も何かせん、

敵こそために恥を得ん。

生けるがままに火刑に処して、

沈黙にぞ敵は強いたる。

されど死に在りて到る処に、

声と言の限りを尽くし歎びて

殉道の徒は勝歌つたう。

同じ1523年に彼は福音的な内的救済を最初の「コラール」として詠った。「いざ歎べ、キリスト者よ、相共に」 (‘Nu freut euch, lieben Christen g’mein.’) の歌がそれである。ルターは僧侶階級や専門合唱団のラテン讃歌にかえて、一般の平信徒が礼拝に家庭に野外に自由に唱えるドイツ語の「コラール（讃美歌）」を創作し始めた。彼はその大部分の素材を聖句や詩篇やラテン及びドイツの古い讃歌から採用しているが、一度ビルターという熔鉱炉を通ると、それが一般に福音的な響きをもったまぎれもないドイツの平民的な「コラール（讃美歌）」となる。

「噫、み空の神よ、覽わせ給え」 (‘Ach Gott vom Himmel, sieh darein.’、詩篇第12篇より)。また、「愚かなる者の口は期く語れども」 (‘Es spricht der Unweisen Mund wohl.’) は詩篇第14篇に基づき、「苦難の淵より汝に叫ぶ」 (‘Aus tiefer Not schrei ich zu dir.’) はいうまでもなく詩篇第130篇に発している。この「苦難の淵より」は日本語の現行讃美歌集第258番「貴きみ神よ、悩みの淵より」に抄訳されている。これらは同じ1523年の作で、ドイツ語新約聖書完訳の翌年に当る。

この翌年1524年には所謂『八歌集』 (Achtliederbuch) なるプロテスタント最初の讃美歌集が刊行された。その半数の四篇が即ちルターの作であったが、ルターは1524年に更に二十歌の「コラール」をものしたので、彼の作は二十四歌となった。この年にザクセン選帝侯聖歌隊指揮者ヨーハン・ヴァルター (Johann Walther) が編集し



た小讃美歌集三十二篇中にはルターのこの二十四篇が悉く収められてある。これにルターは序文を寄せているが、その中で曰く、「聖パウロもこのことを「リント前書第14章で定め」第15節「然らば如何にすべきか、我は霊をもて祈り、また心をもて祈らん。我は霊をもて謳い、また心をもて謳わん」、また「ロサイ人にも命じているように」〔3・16〕「キリストの言をして豊かに汝らの衷に住ましめ、凡ての智慧によりて、詩と讃美と霊の歌とをもて、互に教え、互に訓戒し、恩恵に感じて心のうちに神を讃美せよ」、讃美歌や詩篇を主に對して心から歌い、そうすることによって神の言とキリストの教えがあらゆる仕方であらゆる仕方で追求され体得されなければならない。

似而非僧侶^{えせ}たちは福音によってあらゆる芸術が紛砕されるべきだと揚言しているが、私はそんな意見では毛頭なく、あらゆる芸術を、特に音楽を、これらのすべての能力を我らに与え且つ創り給った神に仕えるために、用いたいと思う。」

多分、1527年につくられたかの有名な「Ein feste Burg ist unser Gott」「われらの神は堅き城なり」（日本語現行讃美歌集第267番「神はわがやぐら」抄訳）を終りにここに掲げて云々……。

「我らの神は堅き城なり」（EIN FESTE BURG IST UNSER GOTT）

一、我らの神は堅き城なり

攻防自在の武器なるぞ。

今や我らは苦難^{なやみ}に遭えど、

神は一切の助けなり。

かの古昔^{いにしえ}よりの悪しき仇敵^{てき}

今や真剣^{あらが}に抗い來たる。

大なる権力^{ちから}多くの謀略^{たくみ}は

その強悍^{おぞま}しき武器にして

現世^{うつしよ}に彼の敵なし

二、我らの力何をか為し得ん、

我ら忽ち^{たちま}失わるべし。

我らのために戦つ義人^{ひと}あり、

神自らの撰びの人ぞ。

たずぬるか、かは誰れと。

その人はイエス・キリスト、

万軍の主なる御神^みぞ。



いかなるあだし神にも非ず。
戦の場はその聖手にあり。

三、縦いこの世は悪魔に満ちて
我らを全く呑まんとすとも
我らいたくは戦慄かじ。
勝利なお我らにぞある。
此の世の君主はいかばかり、
立腹に立ちはだかるも、
何ごとも我らになし得ず。
彼はすでに審判かれてあり。
聖言の一言、彼をば倒す。

四、その徒輩聖言を空しうす、
これに一念の感謝あらなく。
聖子は戦の場にて我らに与す、
彼れの聖霊と恩恵もて。
敵どもは取らば取れわが生命、
財も誉も子も妻も。
すべてのものを奪い去れ！
彼ら何をか勝ち得んや。
神の国こそ我らには在れ。

そういう、文字通りに訳したわけですが、いかにも戦闘的なルターの福音的な響きが烈々として響いているような詩であります。
そういった歌をルターはうたいましたが、もう一つ、私は特に皆さんに紹介したいルターの歌があるから、これをドイツ語から訳します。これは「聖霊の讃歌」という。

「今や聖霊にわれらは願つ」

“Nu bitten wir den heiligen Geist:”

1 今や聖霊にわれらは願つ、

1. Nun bitten wir den heiligen Geist

何はさて措き義しき信仰を。

Um den rechten glauben allermeist,

なうらばみ霊は護らん生涯の果てに、

Daßer uns behüte an unserm ende,

現世を出でて魂の故里に還らんやきい。

Wenn wir heimfahren aus diesem elende.



主よ、あわれみ給え。

Kyrieleis!

2 汝貴き光よ、汝が光輝を我らに与えよ
ただイエス・キリストを知らしめよ、
信実なる救主の許に留まらんためなり。
まことの祖国に彼は我らを伴れ来れり。

2. Du werthes licht! gib uns deinem schein,
Lehr' uns Jesum Christ kennen allein,
Daß wir an ihm bleiben, dem treuen Heiland,
Der uns bracht hat zu dem rechten vaterland.

Kyrieleis!

3 汝甘美しき愛よ、汝が恵みを与えよ。
み霊の熱愛を感じしめよ、
我ら互に心より愛せんがためなり、
平安に在つて一つ心に留まらんためなり。

3. Du süße lieb! schenk uns deine gunst,
Laß uns empfinden der liebe brunst,
Daß wir uns von Herzen einander lieben,
Und im friede auf einem sinn bleiben.

Kyrieleis!

4 汝あらゆる艱難における最高の慰め手よ、
助けよ、我ら恥も死も怖れざらんため。
我らの恩念に萌おれざらんため、
敵が生命を告訴するとき。

4. Du höchster tröster in aller noth!
Hilf, daß wir nicht fürchten schand' noch tod,
Daß in uns die sinne nicht verzagen,
Wenn der feind wird das leben verklagen.

主よ、あわれみ給え。

Kyrieleis!

これが「聖霊の讃歌」という、なかなかいい讃美歌であります。では終わります。

● 祈り

祈ります。

主さま、この最後の集会、詩篇46篇。ユダヤ的な預言者、詩人。またマルチン・ルターの歌を第二の宗教改革への一つの讃歌としてこれを受けとり、その中から本当に御霊内住の世界にこそ第二の宗教改革はハッキリと打ち出されるべきことを自覚し、感謝いたします。この兄弟姉妹たちが、使徒的信仰の中心は正にその事態にあつたことをいよいよしっかりと内にといただきまして、進んで参ります。私たちは自分で宗教改革を、第二の宗教改革をしようとは思いません。あなたが成したまいます。私たちは本当にこの本願の助力に、あなたの御霊の力に一切を委ね奉ります。委ね奉るとは即ち、自分を投げかけて、もちろん、してくださるがゆえに。斯くして主さま、あなたの御意の如くに私たちを、天上に成る如くに地上にも我々を通して成らしめ給うところに、自ずから何ごとかが起こってくることを信じて感謝いたします。



どうぞ、主さま、諸々の患難にあえばあうほど、いよいよあなたに顧みられ、あなたに愛せられることを知り、そして御名を讃えつつ、喜びつつ、歌いつつ、進んで行くことができますように願ひ奉ります。ここにあるところの兄弟姉妹たちは本当の兄弟姉妹たちです。この天上的な事態を地上において既に現象し、超現実を現実として進んで参ります。また、私たちにとっては、御霊にあつては、本当の超現実こそが根源現実であることをしかと受けとり、僕もまたうれしくてたまりません。

主さま、斯くして、この兄弟姉妹たちと共に、互いに助け、互いに荷ない合いながら、進んで行きます。そしてまた、一人でも二人でも三人でも、とにかく本当の意味における隣人に向かつて、この善き音信を身をもつて証していくことができますようにお助けください、お導きください。

本当にこの三日間の集會を斯くのごとく導いて下さつて感謝いたします。また、奥田兄弟のこの群、京都のキリスト召団は大事な召団です、大事な群です。

「二、三人わが名において集まる所に我もまたその中にあるなり」

と。主さま、どうぞ、この少数者の中に本当にあなたがいたもうて、これがジリジリと展開し、この群の中の一人びとりの単独者が全体を担つていくところに、本当のことがあることを受けとつて、進ましめたまえ。あなた自身が本当に担つてくださるから感謝であります。いかなることにも絶対に負けません。主さま、いろいろなことがあつても、絶対に行き詰まりません。

「^せ為んかた尽くれども^{のぞみ}希望を失わず、倒さるれども^せ亡びず。これイエス・キリ

ストの救にあずかり、あなたのキリストの生命の我らに現れんがためなり」

とパウロが絶叫しました。その通りです。アーメン、ハレルヤです。

パウロ、ヨハネ、ペテロ、彼らの書簡は本当に私たちは天来の恋文としてこれを受けとり、そして本当に、主さま、この御言を第一の糧として、進んで参ります……（異言）……。

どうぞ、この兄弟姉妹たちを通して、あなたのご栄光がじりじりと現れて下さらんことを切に願ひ奉ります。絶対にへこたれませんか。感謝いたします。

斯くして、心から御名を讃え奉ります。今、悩める者、苦しめる者、悲しめる者があつたら、どうぞ、その友となり、その中に入り、この喜びの世界に、生命の世界に、光の世界に、愛の世界に、これを導き上げるところの事態に私たちを通して真に成らしめたまえ。

今、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちのそれと共に御名により捧げ奉る。アーメン。

